

古典への入り口として

当代屈指の作家に助けってもらって、現代小説から古典へ、反転！

岡田 一心

近松門左衛門『曾根崎心中』

くはつと対話するためにく

此世のなごり、夜もなごり、死に行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足づつに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ。あれ数ふれば暁の、七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の、鐘の響きの聞納め。寂滅為楽と響くなり。鐘ばかりかは。草も木も。空もなごりと見上ぐれば。雲心なき水の音北斗は冴えて影映る星の妹背の天の川。梅田の橋を鵲の橋と契りていつまでも、われとそなたは女夫星。かならずさうとすがり寄り。二人が中に降る涙川の水かさも増さるべし。

【指導書の訳文】

この世の別れ、夜も別れと、死に行く身をたとえると、(ちようど)あだしが原の道の露が一足ごとに消えていく(ように)、(また)夢の中の夢のように哀れなものである。あれ数えると、あの明け方の七つの時(午前四時)を告げる鐘が六つ鳴って残る一つ(の鐘の音)がこの世に、鐘の音のききおさめ、(となり)寂滅為楽と響くのである。鐘(の音)ばかりであるうか、(いやそうではなく)草も木も、空も別れと見上げてみると、雲は何の苦しみもないように(浮かび)水も(無心に)音を(たてて流れている)。北斗星は冴えて(水面に星)影を映し、(そして)夫婦の星である牽牛と織女は天の川の川の両側に分かれて、梅田の橋を鵲の橋(二人の逢瀬を助ける橋)として契りをこめて、いつまでも、わたしとあなたは夫婦星、かならずそのようになるうとすがり寄り(泣くと)、二人の間に落ちる涙で、川の水かさも増えるであろう。

【角田光代『曾根崎心中』】

目に映るもの、ぜんぶ最後だと初は思う。振り返れば明かりの消えた天満屋。新地の店みせ。ところどころ明かりがついて、三味線の音が聞こえてくる。走れば過ぎていく光景は、まるでうしろへ流れて消えていくようだ。見上げれば星がまたたいている。星も最後。夜も最後。あの世はここよ走る初の耳に、ときを知らせる鐘が響く。この鐘も最後。あの世はここよりずつといい、何しろ二人でずつといられるのだと、鐘の音がなぐさめるように初には聞こえる。

☆ 古典は不親切

A はつの「死ぬ覚悟」をちよつと解説「いつまで生きても同じこと」
B 遊里で生きるということ「旦那様内儀様、さらばでござんす」
C 一緒に死ぬことの意味「後の世もなをしも一つ蓮ぞや」
D 二人の生い立ちときずな「しやくり上げ声も惜しまず泣きければ」
E 等身大の二五歳と十九歳「断末魔の四苦八苦」?
F はつの目が最後に見たもの

紫式部『源氏物語』 若紫

【林真理子『六条御息所 源氏がたり』】

柴垣のこちら側に立ちますと、意外なものに飛び込んでまいりました。そこにいるのは若い女でも女童でもなく、中年の尼だつたのです。簾を少しまき上げてお経を讀んで、部屋の中がよく見えません。持仏に花をお供えし、その方はお経を讀んでいました。四十過ぎと見え、柱にも大儀そうであり、脇息の上には経文を置いて讀んでいきます。その姿がいかにも大儀そうであり、脇息のおぼろげに憶えていた少前、あの柱にもたれてばかりいたのです。

その時です。奥から強い光が走ってくるような感じがありました。キラキラとしたものが、突然あの方の目を射たのです。

それはひとりの少女でした。白い下着に、着なれて柔らかくなった山吹襲の表着を着ています。よほど急いでいるのか、肩までの髪がゆらゆら揺れ、口はしつかりと結ばれています。女の子が家の中で走るといふのはとても不作法なことでした。泣いたと見え、こすつた顔が赤くなつていました。少女の美貌は疑いがないもので、先ほどの女童たちと、顔つきも着ているのもまるで違っています。

・ 垣間見
・ 尼なりけり
・ なやましげなり
・ あてなり
・ 似るべうもあらず
・ 生い先見えてうつくしげなるかたち

☆ 「その時です。」のその時、源氏が見たものを思い描いて比喻を使って表現してみても。直喩でも隠喩でも。

「何ごとですか。子どもたちとまた喧嘩をしたのですか。」
と見上げる尼君と少女の顔がどこかしら似ていて、これは娘に違いないとあの方は見当をつけません。が、少女は十歳ほどなので、四十過ぎの尼君が母とすると、随分遅い子になります。伏籠の中にちゃんと入れておいた「雀の子を犬君が逃がしちやつたの。」伏籠の中にちゃんと入れておいたのに「訴えるように尼君に言う。少女の愛らしさといつたらありません。大人になつたらどれほどの美女になるだろうかと思われほどです。大人尼君は呆れたように、深い悲し気なため息をつきました。今日明日とも知れない命だともつぼいことをおっしゃるの。私がもう今日明日と情けないこと。」
そして、こつちにいらつしやいと手招きしますと、少女は素直に「こ」と膝をついて座ります。

・ 逃がしつる
・ おさなし
・ 心うし
・ つゐゐたり

○古典
まず林真理子・角田光代があつて 帯

○資料 3年生『道行き』心中・遊里 説明がない必要なかつたから 事件後一ヶ月での上演

躍動感

① 窮地に陥った事情

② 縁の下の徳兵衛

③ 「死ぬる覚悟が聞きたい」足首のど笛

A 死 ちつともこわくない

④ 文楽名場面

B 遊里システム 主人は父でおかみは母

⑥ 緊迫の脱出シーン

C 噂に閉じこめられる 人の口の上ですら、わたしたちは離れることがない

D 生い立ち さみしいと思う人は、しあわせなんだ 大人になるとこわいもんは

ふえる さみしいことを知らないほどさみしい子どもを抱いている

ような気持ちになつた↓歌舞伎・文楽の女たち 白無垢

⑪ 親

E 物語 もう平気。あてらは次に会うてもすぐわかる。

あどけない会話 声を上げて泣く（近松）

F きれいなわたしたちがこの世で最後に見る気色だよ

子どもが泣くようなまっすぐな声が聞こえる 涙 近松のつもり

○忘却曲線

読んだこと・書いたこと・聞いたこと・考えたことさえ忘れる

感じたことは残る 感じる 腑に落ちる 腑は、はらわた、はらわたはこころ

もし自分が近松なら

泣ける ←

3年生『若紫』公開授業

きっかけは、「運命の出会いにしては、ちよつと地味：」（高校生には）

林真理子 六条御息所 斬新 色気

「桐壺」から源氏が北山に来るまでのストーリー 端折りながら

限りなう心をつくしきこゆる人 源氏の涙

垣間見効果

心情語の空気感

・ なやましげなり 体の具合がよくないのか、いかにも大儀そうで

（ひどくだるそうに）

・ あてなり 本当に気品のある（上品で）

・ おさなし 子どもっぽい（幼い）

・ うつくしげなり なんとも愛らしく（見るからにかわいらしい）

心情語

以外にも

・ けりの持つ詠嘆パワー

そこにいるのは若い女でも女童でもなく、中年の尼だったので

（それは尼なのであった。）

・ ベしの持つ当然パワー

まるで違っています（比べようもなく）

・ つる連体形の余韻

・ つるみたり ちよこんと膝をついて座ります（膝をついて座つた）

林源氏の表現を原文から探す作業

少女の可愛らしさ実感

☆「その時です。」の続きを比喻を使って作ってみよう（公開授業）

子犬・小鳥・光の玉

○源氏物語

どの登場人物も不完全な性格の持ち主（特に主人公）

← 現実の人間に重なり合う

親友になれそうなのは
相談相手にはなりたくないのは
恋のライバルになるのは（わかる！）
自分が似てるのは（わかる！）

○心

一番嫌いな科目・古典（ベネッセ調べ）
― 入試に必要なだから― 比較的習熟度の高い子どもがさくさく勉強するもの

文法・文学史・古典常識・口語訳

それはそれだけ、それだけ、それだけ、泣いてもらいたかったんじゃないか

泣くためには心が読解してもらえば泣いても良かったか

昔の人はこんなだっただけ、同じ痛みやよろこびに一緒に泣いてほしい

食べたものだけで私の体ができています

感じたことは必ず知識に循環するはず

感じることは必ず知識に循環するはず

○古典との対話

この小さな島国で、自然に感謝しながら自給自足で営々と生きてきた

そしてひたむきに恋をしていた名のある、名もなき人々と対話するということ

○当代屈指の作家の力を借りて

池澤夏樹 天女を現世に連れてきて、一緒に暮らしたい。そのためにはTシャツと

角田光代の源氏・森見登実彦の竹取

角田光代の源氏・森見登実彦の竹取

○古典への入り口として

とにかく子どもたちを古典への入り口へ連れて行きたい

原文に興味を持って、確実に人生は豊かになる

そうならなくても、確実に人生は豊かになる